

詩品と書畫論

一

梁の鍾嶸の『詩品』は、劉勰の『文心雕龍』とともに、六朝文學理論を代表する精華として夙に名高い。この書において、著者鍾嶸は、漢から梁に至る百二十三人の詩人を上中下三つのランクに格づけし、それぞれについて辛辣な作家論を展開している。三品の内譯を記せば、上品十二人（作者不明の「古詩」を含む）、中品三十九人、下品七十二人であり、而して彼が最大の敬意を拂うのは、曹植を筆頭とし劉楨・王粲を擁する三世紀建安の「風骨」に溢れる詩人たちである。また逆に最も露骨に嫌惡の感情を示すのは、沈約をはじめとする齊梁の詩人、すなわち著者と同時代の修辭主義的詩人たちである。

こうした三段階評價の方式による批評が現われた背景として、私はかつてこれが『論語』以來、中國人にとってきわめてなじみ深い人物評價の方法であること、六朝の官吏登用制度である九品中正制を意識した日常的な親近感を持つ評價方法であることなどを指摘した。（中國文明選13『文學論集』所收『詩品』解題参照、一九七二年朝日新聞社刊）。しかし、そうした背景だけではなお説明し盡せない恨みが残ることも、同時に感じていた。それは中國の文學理論が、鍾嶸からほぼ三世紀前

詩品と書畫論

興膳宏

の曹丕『典論』論文篇が始まって、『詩品』よりわずか十年あまり前に完成した『文心雕龍』に至るまで、作家や作品の優劣の品評をめぐる理論を展開するという發想を、實はほとんど持っていなかったことによる。そのことは、鍾嶸自身によってすでに指摘されており、敢えて優劣論中心の評論に挑む自身の書がやがて有するであろう効果も充分に計算されていた。彼は序において、陸機の『文賦』、李充の『翰林論』、摯虞の『文章流別志論』等の代表的な過去の文學論が、「皆就きて文體を談じ、優劣を顯わさ」ざることと不滿とし、また謝靈運編『詩集』をはじめとする總集が、「並びに義は文に在りて、曾て品第する無き」ことを遺憾として、三品の品第方式による『詩品』を著わしたと述べているのである。鍾嶸のアイディアは確かに新鮮だったといふべきだろうが、それまでおしなべて優劣の批評を缺く文學論の世界で、『詩品』のような書が俄かに出現したことは、一種唐突な印象を與えるのも事實であろう。

しかし、視野をもう少し廣げて、文學論に隣接する書論・畫論の世界を眺めてみると、ここでは鍾嶸に先んじてすでに品第方式にもとづく評論が行なわれていた。鍾嶸もおそらくそうした事情には通じていたはずである。とすれば、書畫論の領域における品第論が鍾嶸の發想

にどこまで影響した可能性があるのか。その可能性を検討してみることによって、『詩品』ひいては六朝文學理論にややちがった角度から光を當てることもできるのではないか。それがいま敢えて小論を草する所以である。

二

品第による評價方法を最初に用いたのは、おそらく書論であつたらう。宋の虞龢(か)に『論書表』の名で知られる文章があり、『法書要録』等に収載されている。これは當時中書侍郎の任にあつた虞龢が、宋の明帝の命を受けて、秘府に藏される王羲之・王獻之ら古來の名跡の調査整理にあつた報告書であり、泰始六年(四七〇)九月の日付で上られている。後世に傳わる王羲之父子の逸話は、この文章に原據を有するものが多い。虞龢は二王等の書を整理するに際して、裝背標軸を改めて保存に萬全を期するとともに、一巻の中に品等による配列を工夫して、鑑賞の便に資したと述べている。

「凡そ書は同じく一巻に在りと雖も、要かなず優劣有り。今此の一巻の中に、好き者を以て首に在らしめ、下なる者は之に次ぎ、中なる者は最も後ならしむ。然る所以の者は、人の書を見るととき、必ず開卷に鋭くして、將まさに半ばならんとするに懈怠す。既にして略進み、次に中品に遇えば、賞悦留連して、巻を終らざるを覺えず。」

ここにいう「好者」「中者」「下者」とは、まさしく上品中品下品の品第にはかならない。『法書要録』の編者でもある唐・張彦遠の『歷代名畫記』では、卷三論裝背標軸にこのくだりを引いて、「此れ虞龢、書畫を裝するの例を論ず、理に於て甚だ暢たぶ」という。つまり畫の場

合も、虞龢の立てた原則はそのまま通用するというのである。

虞龢以前にもこうした三品等による評價が行なわれていたかどうかは、もはや徵すべき資料を缺くが、しかし少なくともいえるのは、書論の場合は文學論と事情を異にして、優劣の論評が相當早くから行なわれていた形跡のあることである。たとえば初期の書論として有名な晉・衛恆(二五二—二九一)の『四體書勢』(晉書「衛恆傳所收」)は、古文・篆書・隸書・草書の四種の書體について、それぞれの沿革と特性を論ずるが、うち篆書の章では、秦以來の名筆を歴敘している。

「秦の時、李斯は號して篆たに工みと爲す。諸山及び銅人の銘は、皆斯しの書なり。漢の建初中、扶風の曹喜は、少しく斯に異なるも、亦た善と稱す。邯鄲淳は焉まを師とし、略其の妙を究む。章誕は淳を師とするも及ばざるなり。……漢末に又た蔡邕有り、斯・喜の法を采り、古今の雜形を爲すも、然れども精密閑理は淳に如かざるなり。」

次いで隸書の章では、魏の梁鶴の書が曹操の愛玩を蒙つたことを記している。

「魏の武帝、帳中に懸けん著し、及ま以に壁に釘して之を遊び、以爲えらく宜官に勝れりと。」

宜官は、すなわち師宜官、後漢末における隸書の大家である。また草書の章では、他の章におけるよりもいっそう明確に諸家の優劣が論じられている。評價の最上位を占めるのは、後漢の張芝、字は伯英、であつて、「草聖」と稱され、他の能筆は多かれ少なかれ彼との比較においてその位置づけがなされる。

「伯英の弟文舒なる者は、伯英に次ぐ。又た姜孟穎・梁孔達・田彦和及び韋仲將の徒は、皆伯英の弟子にして、世に名有り、然

れども殊に文辭に及ばざるなり。羅叔景・趙元嗣なる者は、伯英と時を並べ、西州に稱せらるるも、巧を矜りて自與し、衆頗る之に感う。「故」に伯英は自ら稱すらく、上は崔「瑗」・杜「度」に比ぶれば足らず、下は羅・趙に方ぶれば餘り有りと。河間の張超も亦た名有り、然れども崔氏と州を同じくすと雖も、伯英の其の法を得るに如かざるなり。」

このように、「四體書勢」の批評では書家の巧拙に判断を下す場合、常に比較ということが意識に上される傾向にある。つまり甲なる書家に對する評價は、彼の書がいかにくれてるかという絶対評價だけでなく、乙なり丙なりの書家と比較してどうかという相對評價を含むことよって、はじめて批評としての安定を得るようなところがある。そして、それは著者衛恆自身の判断というよりも、書家間あるいは巷間での風評にもとづく判断という感じが強い。のちに「書聖」として尊崇を集めた王羲之にしても、自己の書が過去の名家たちに比較していかなる位置にあるかということに、強い關心を示していたようである。彼の『自論書』(『法書要錄』卷二)にはいう――

「吾が書は之を鍾「繇」・張「芝」に比ぶれば、まさに抗行すべし、或いは之に過ぎんと謂う。張の草はなおまさに雁行すべし。張は精熟すること人に過ぐ。池に臨みて書を學び、池水盡く墨と爲る。若し吾之に耽ること此くの若くならば、未だ必ずしも之に謝せざらん。」

その王羲之の子獻之には、また自分の書を父との比較において意識する氣持が見える。

「謝公(安)、王子敬に問う、君の書は家尊に何如と。答えて曰く、固よりまさに同じからざるべしと。公曰く、外人の論は殊

に爾らずと。王曰く、外人那ぞ知るを得んやと」(『世說新語』品藻篇)。

謝安に父との優劣を問われて、獻之が「固當不同」と答えたのは、婉曲な表現で自負心を包んだ感じだが、虞翻『論書表』に載せられる同じ話では、「故當勝」(もとよりまさに勝るべし)とむきつけな自負の表白になっている。王獻之の逸話が『世說』品藻篇に見えることがいみじくも示唆するように、こうした書人の優劣論も、より廣くいえば、六朝の時代に盛行した人物評論の一環とみるべきであろう。人物評論隆盛の時代相を反映する『世說』諸篇の中でも、品藻篇はことに人物相互の比較論からなる話が多く、名士のサロンでの人物月旦が個人の社會的地位を決定する重要なコメントであったことを思えば、ある意味で最も現實的な篇とさえいえるかもしれない。王羲之に因む話としては、なお次のような例が同篇に見える。

「王右軍の少き時、丞相(王導)云えらく、逸少は何に緣りてか復た萬安(劉綏)に減らんやと」。

「時人、阮思曠(裕)を道えらく、骨氣は右軍に及ばず、簡秀は眞長(劉惔)に如かず、韶潤は仲祖(王濛)に如かず、思致は淵源(殷浩)に如かざるも、兼ねて諸人の美有り」。

蛇足までにつけ加えておけば、これらの批評は羲之の人物についてなされたもので、彼の書についてのものではない。さて、そうした時代の波が書論にも及んだものとすると、勢い文學論の場合が問題にならざるをえないが、鍾嶸もいうように、文人あるいは文學作品の優劣比較ということになると、書論にくらべてその例ははなはだ少ない。『世說』文學篇の「孫興公(綽)云えらく、潘岳の文は爛かなること錦を披くがごとく、處として佳からざるは無し。陸機の文は沙を

排いて金を筒ぶが如く、往往にして實を見る」や、「孫興公云えらく、潘の文は淺くして淨く、陸の文は深くして蕪なり」などの評論にしても、重點は優劣の比較よりも、むしろ作風の對照にあるとすべきだろう。『文心雕龍』才略篇が、「魏文（曹丕）の才は、洋洋として清綺なるに、舊談は之を抑えて、「曹植を去ること千里と謂う。然れども子建（植）は思い捷くして才は備、時に麗わしくして表は逸なり。子桓（丕）は慮い詳やかなれども力は緩やかなり、故に先鳴に競わず云云」と、大いに曹丕のために辯ずるのは、乏しい例の中の一つに數えられようか。

書論とともに検討の必要があると思われるのは、圍碁の場合である。鍾嶸は『詩品』序において、「詩の技爲る若きに至りては、較爾として知る可し。類を以て之を推せば、殆んど博奕に均し」といっている。「博奕」における實力判定の明らかさは衆目の認めるところ、さしてこそ奕棋の實力を評價するに古來品第法が用いられたのである。『宋書』羊玄保傳に「善弈碁、碁品第三」、『南齊書』江敳傳に「圍碁第五品、爲朝貴中最」、同蕭惠基傳に「當時能棋人、琅邪王抗第一品、吳郡褚思莊・會稽夏赤松並第二品」などとあるところからすれば、官吏登庸法と同じ九品等の序列が適用されていたものらしい。『隋書』經籍志子部兵家類に晉・范汪等注の『碁九品序錄』一卷、袁遵撰『碁後九品序』一卷が著録されているのも、この推測を傍證しよう。奕碁を愛好した梁の武帝は、柳惲（四六五—五一七）に命じて棋譜を定めさせたが、『南史』柳惲傳によれば、「格に上る者二百七十八人、其の優劣を第し、碁品三卷を爲る。惲は第二と爲す」とあり、隋志に著録される梁武帝撰『圍碁品』一卷とおそらくは同一の書かと思われる。『梁書』柳惲傳は、惲が棋譜を定めた記事を天監初年の條に記してお

り、沈約による序文（『藝文類聚』卷七十四巧藝部圍碁）も存しているから、『圍碁品』が沈約の死後著わされた『詩品』よりかなり早く完成していたことは疑いない。沈約序には、「今名氏を撰録し、品に隨いて詳らかに書す」とあるから、その記述法はあるいは『詩品』のそれに影を落しているかもしれないのである。

「博奕」の評価法に倣ったとまでは、さすがに鍾嶸もいわないが、その品等論が書の場合と同様にかなり古くからあり、『詩品』の發想にあるヒントを與えた可能性は充分認めておかねばならない。だが、文學における優劣判定が果して彼のいうように「博奕」のごとく「較爾として知る可」きかどうかは、そうした優劣論に重きを置く批評の先行例に乏しいことからも、かなり疑わしいとすべきであろう。その點、圍碁はいうまでもなく、書畫にしても直接視覺に訴える藝術であるだけに、鑑賞が優劣の比較に結びつきやすいことは確かである。たとえば、展覽會で同じ部屋に掲げられる作品甲乙、あるいは作者A Bを比較してみたい衝動は、素人鑑賞でもよく經驗するところである。一般的にいつて價值評價に複雑な要因を伴う文學は、優劣判断の較爾たることにおいて、やはり本質的に書畫に如かないのではないだろうか。

三

明確に上中下の品第法を用いて書かれた書論は、梁の庾肩吾の『書品』だが、その制作時期はのちに考證するように、『詩品』よりもかなり遅れる。だから、『詩品』に對する書論の影響について検討するとすれば、『詩品』が書かれたとみられる梁の天監十二年（五一三）から同十七年（五一八）以前に著わされたことが明白な作品に、對象を限

らなければならぬ。⁽³⁾ 宋から齊にかけて現われた書論の中で、作家論を中心とするものに、宋の羊欣の『古來能書人名』と齊の王僧虔の『論書』(ともに『法書要錄』卷一)とがある。ともに數十の短章からなり、おおむね書家の略歴や書風、それに書をめぐる逸話などにより構成されて、短いながら書家列傳の體裁を整えている。こうした形式にさらに敘述の肉づけが加わると、唐・張懷瓘『書斷』の書人論のような内容になるはずである。先に引いた虞龢の『論書表』によると、晉の衛恆にも『古來能書人錄』一卷があった由であり、これが現行の『四體書勢』の一部をなすものだったのか、あるいは全くの別著だったのかは俄かに判断できないが、とにかく羊欣以前にもこうした形の作家論は存在したらしい。

さて、羊欣の『古來能書人名』一卷は、『南齊書』王僧虔傳によれば、王僧虔が齊の太祖高帝蕭道成(在位四七九—四八二)に上ったものとされる。いまその一章を引くと――

「羅暉・趙襲は、何許の人なるかを詳らかにせず。伯英(張芝)と時を同じくし、西州に稱せらるるも、矜許自與し、衆頗る之に惑う。伯英、朱寬に書を與え、自ら敘して曰く、上は崔(瑗)・杜[度]に比ぶれば足らず、下は羅[暉]・趙[襲]に方ぶれば餘り有り」と。

これはすでに前章で引いた『四體書勢』草書の章とほとんど同内容であり、他にもそうした例が乏しくないことからすれば、羊欣の批評には衛恆を引き繼いだところがあったのだろう。ところで、この後半部の張芝が自らの書を評したことがば、「上比崔杜不足、下方羅張有餘」は、古くからかなり有名だったらしく、『後漢書』趙岐傳注や『藝文類聚』卷七十四巧藝部書でも、『三輔決錄』に據るとしてこの言を引

いている。いま『古來能書人名』の數ある章のうちから、ことさらこの一章を挙げたのはほかでもない。『詩品』に件の張芝のことばをもじった表現が見出されるからである。上品に名を列せられる諸家のうち、魏の王粲は、悲哀の吐露に傾いて、表現はみごとだが内容的に弱いところがあるとされ、「曹[植]・劉[楨]」の間に在りて、別に一體を構う」と評されるのだが、そのあと鍾嶸は彼をもう一度同時代の曹丕・曹植兄弟と比較している。

「方陳思不足、比魏文有餘」。

陳思(植)に方ぶれば足らず、魏文(丕)に比ぶれば餘り有り。「不足」「有餘」の對應は古來例に乏しくないが、「方…不足」「比…有餘」は他に類例を見出しにくい。

一方、王僧虔『論書』は、『法書要錄』のほか『南齊書』王僧虔傳にも一部が引かれており、羊欣の書よりもいっそう優劣の比較に重點を置いた評論だが、ここにもまた『詩品』との類縁を思わせる表現が見出される。『詩品』中品のうち、謝瞻・謝混・袁淑・王微・王僧達という五人の宋の詩人を一まとめに評する章には、次のようにある。

「才力苦弱、故務其清淺、殊得風流媚趣」。

才力苦弱(たはぶはぶ)弱く、故に其の清淺に務め、殊に風流媚趣を得たり。

謝瞻以下五人の詩人たちは、すぐれた詩を生むための文才に乏しく、あるいはむしろ彼らが才能の貧困を自覺していたがゆえに、「清淺」さらりとした調子を出そうと努め、優雅に華やいだ趣きを得ることに成功しているというのである。この章と類似する表現は、『論書』の宋・蕭思話に對する批評に見られる。蕭思話は行書の名人で、梁の袁昂の『古今書評』(『法書要錄』卷二)では、羊欣の眞書、孔琳之の草

書、范曄の篆書とともに、彼の行書を「一時の絶妙」と評し、『書斷』では能品に列している。『論書』の批評はごく短いものだが、その全文を掲げると――

「蕭思話全法羊欣。風流趣向、殆嘗不減、而筆力恨弱」

蕭思話は全て羊欣に法る。風流趣向は、殆んどまさに減ぜざるべきも、筆力弱きを恨む。

「風流趣向」という四字の連語はここだけに用いられているが、みやびな趣きということであろう。蕭思話はその點で師の羊欣に劣らないが、「筆力」これは王僧虔がしばしば評價のポイントにするところであり、その筆力が残念ながら弱いというわけである。『詩品』の謝瞻等評においては、「才力苦弱」と「風流媚趣」とが五詩人の短所と長所という形で對應しあっているのだが、『論書』の「筆力恨弱」と「風流趣向」についても同じことがいえる。この關係をさらに抽象化すれば、「力」すなわちエネルギーなたくましさ、力とはおのずから別次元の「風流」あるいは「媚趣」の對應であろう。因みに「風流趣向」は、『書斷』能品の蕭思話評では「風流媚態」に作られている。書論において「媚趣」の語を用いた例としては、『古來能書人名』の王獻之評に、「骨勢不及父、而媚趣過之」とある。ここでも「媚趣」は力量感を意味する「骨勢」と對應しあっている。なお、『晉書』王獻之傳では、「骨勢」は「骨力」にいかえられている。

『論書』では、他にも「力」と「媚」とが對比される章がある。その一つ晉の郗超に對する批評には、「緊媚過其父、骨力不及也」とあり、先の王獻之評に似て、「緊媚」と「骨力」の二點をふまえて、郗超とその父郗愔を比較したものである。いま一つ、宋の謝綜に對する批評にも、「書法有力、恨少媚好」とあって、これまた「力」と「媚」

を對應させた評價という點で、蕭思話評と同斷である。そして、この對應關係は、『詩品』序の「幹之以風力、潤之以丹彩」や、上品曹植評の「骨氣奇高、詞彩華茂」における「風力」と「丹彩」、「骨氣」と「詞彩」の對應關係にも見あうものといえるだろう。ところで、「媚」の字を含む評語は、『詩品』以前の文學論中に使用例がなく、人物評論の書である『世說』にもその例を見ない。他方、書論では上記の他にもなお「妍媚」（『論書表』）、「婉媚」（『論書』）のような例がある。⁽⁴⁾ 『詩品』の「風流媚趣」は、或いは書論から導入された評語だったかもしれない。

ここでもう一度『詩品』の謝瞻等評に戻ることにしよう。五人を概括的に評した既述の箇所につづき、評論の後段は各人に對する比喩的な評價がなされている。

「課其實錄、則豫章僕射、宜分庭抗禮。徵君太尉、可託乘後車、征虜卓卓、殆欲度驂驪前。」

其の實錄を課れば、則ち豫章（謝瞻）と僕射（謝混）は、宜しく庭を分ちて抗禮すべし。徵君（王微）と太尉（袁淑）は、後車に託乘すべし。征虜（王僧達）は卓卓として、殆んど驂驪の前を度らんと欲す。

彼ら五人は詩風において共通點を多く持つゆえに、一まとめに批評されるのだが、より詳細な分析を加えれば、五人の間にも差異は存する。すなわち主客が宮庭の東西に對等の資格で相對する「分庭抗禮」の比喩で評價される謝瞻・謝混が最上位、馬車に喩えれば彼ら二人の「後車」に乗る地位にあるのが王微と袁淑、ひとり離れて獨走し、主觀的には駿馬を追いぬくつもりのエクセントリックな存在が王僧達ということになる。さて、問題は最後の比喩「欲度驂驪前」だが、これ

は『論書』王洽評中に見える王獻之のこぼをそのまま利用したものである。「子敬戲云、弟書如騎驃駁駁、恒欲度驃、驃前」(子敬戲れに云えらく、弟の書は驃に騎り駁駁として、恒に驃驃の前を度らんと欲す)。後進の王珉に對するいかにも王獻之らしい皮肉な揶揄である。謝瞻以下の五人のうちで、王僧達は最も後輩になり、また王珉と同じ琅邪の王氏の一族でもあるので、鍾嶸の皮肉もきわめて効果的である。この逸話の原據である『論書』の著者が、王僧達の從弟の王僧虔であることも、鍾氏の意識にはあつたかもしれない。

以上のような系統的な影響關係をたどるには至らないまでも、書論の文章の中には、他にも『詩品』と類似した表現を見出すことができる。以下それらを列挙すれば、『詩品』序の「次に輕薄の徒有り、曹劉を笑いて古拙と爲す」は、虞龢『論書表』の「輕薄の徒は、銳意率し學ぶ」に、上品古詩評の「客從遠方來、橘袖垂華實は、亦た驚絶と爲す」は、『論書』張芝等評の「惟だ筆力の驚絶なるを見る」に、中品張華評の「今之を中品に置かば、弱きを疑い、之を下科に置かば、少なきを恨む。季・孟の間に在り」は、『論語』微子篇を原據としつつ、『論書』中の某氏に與えた書の「昔、杜度は殺字甚だ安きも、筆體微が瘦、崔瑗は筆勢甚だ快なるも、結字は小しく疎なり。二者の間に居處すること、亦たなお仲尼の季・孟に方べしがごとし」に、中品陸雲等評の「篤くして之を論ずれば、朗陵(何劭)を最と爲す」は、『論書』王廙評の「右軍の前は、惟だ廙を最と爲す」に、中品謝朓評の「叔源(謝混)をして歩を失わせ、明遠(鮑照)をして色を變ぜしむるに足る」は、『論書』范曄評の「范は後に背叛し、皆故歩を失う」に、それぞれ類似の表現が見出される。しかも、多くの場合これらは優劣の評價に關連して用いられているのである。『論書表』にしろ『論

書』にしろ、さほど長い文章でもないのに、こうした『詩品』と共通の語彙を少なからず有することは注目される。

こうして見てくると、優劣の比較を常に意識に置く書論の發想法は、鍾嶸にとつてやはり大きな意味を持つていたように思われる。『詩品』序によれば、この書の構想はもともと劉繪(字は士章)なる人物から受け繼いだものだという。「近ごろ彭城の劉士章は、俊賞の士なり。其の淆亂を疾みて、當世の詩品を爲らんと欲し、口陳襟榜するも、其の文末だ遂げず。感じて作る」。確かに『詩品』の構想が直接には劉繪を襲つたものであつたにしても、著者は意識的に、ある場合はまた無意識的に、書論の方法論を援用した可能性が考えられてよいのではないだろうか。他の藝術分野に全く無關心な批評眼の持ち主が、「優劣を顯わさず」、また「曾て品第すること無き」文學批評の傳統の中で、『詩品』のような書を著わすことはおそらく不可能でさへあつたのではないか。

四

次に目を書論の方に移してみよう。品第による評價法を最初に用いたのは書論だつたが、品第法によつて全體を構成する書は、まず書論の領域において現われた。南齊・謝赫の『古畫品錄』一卷がそれである。謝赫の傳記は全く不明で、唐・張彦遠の『歷代名畫記』に南齊の人として記されるのが、彼に關する唯一のアイデンティティである。また書名にしても、陳・姚察の『續畫品』が謝赫の書を繼ぐものとして書かれているところからすれば、元來は『畫品』と稱されてきたのかもしれないし、隋志の史部簿錄類に著録される『名手畫錄』一卷とは、さらにまたこの書の別稱だつた可能性もなしとしない。テク

ストも、現在一般に行なわれる津逮祕書本等と『歷代名畫記』に引かれるものとは多少異なつた部分があるので、現行本が必ずしも原形を保っているとはいひがたいが、いまは暫く津逮祕書本に據りつつ名畫記本を併せ参照することにする。

この書の序で謝赫は、「夫れ畫品なる者は、蓋し衆畫の優劣なり」と、自分の批評が優劣論の立場からなされるものであることを宣言している。そして本文では、宋の陸探微以下二十七人（名畫記に引かれるのは二十八人⁽⁵⁾）の畫人を、品第によつて序列づけた上、各人についての個別的な批評を行なっている。

ただ、同じく品第法とはいつても、『詩品』と比べてみると、その運用のしかたにはかなりちがつたところがある。まず『詩品』は上中下の三段階評價方式だが、『古畫品錄』の場合は第一品から第六品までの六段階方式になっている。それは『四庫全書總目提要』が指摘しているように、繪畫を評價する基準として、著者が「畫の六法」というものを提起していることと大いに關連がある。序によれば六法とは、一に「氣韻生動」、二に「骨法用筆」、三に「應物象形」、四に「隨類賦彩」、五に「經營位置」、六に「傳模移寫」（名畫記本による。津逮本では「傳移模寫」）である。謝赫は古今の畫人で「六法」のすべてを體する者は稀で、多くはそのどれかを善くするにすぎないといひ、「唯だ陸探微・衛協のみこれを該う」といふ。つまり「六法」のすべてを兼ね備える陸・衛の輩にして、はじめて完璧な畫家と稱するに足るわけであり、彼ら二人はもちろん第一品に位置づけられている。他の諸家に對する評價にもこの基準が用いられていることは、個別の批評からもうかがえる。六品という品等の數は、「六法」という物指しに合せて設けられたらしいのである。

『古畫品錄』の六品等評價には、細かく検討してみると、實はさらに詳しい段階區分のなされていたらしいことがわかる。『歷代名畫記』卷四敍歷代能畫人名に引用されている『古畫品錄』では、畫家の品等は單に第〇品というだけでなく、同一品等に屬する畫家相互の序列が記されているのである。たとえば第一品の陸探微については、「上品の上、地の言を寄する亡し、故に居きて第一に標す」、同じく曹不與については、「第一品、陸の下、衛の上⁽⁶⁾に在り」、同じく衛協については、「第一品曹不與の下、張墨・荀勗の上⁽⁷⁾に在り」とある。この記述にしたがつてここに名を列ねる五人の畫家に序列をつければ、陸探微・曹不與・衛協・張墨・荀勗の順序になる。津逮本『古畫品錄』第一品に屬する五人の名は、まさしくこの順序（張・荀の二者は同列）に排列されているのである。以下多少の異同を伴いつつも、大筋においては同じ現象が見られる。だから謝赫の設けた品等は表向き六品であっても、その實第一品から第二十七品までのランクに細分化されていたことになる。こうした品第法は、『歷代名畫記』卷一敍畫之興廢に記される南齊の高帝の事蹟と基本的に同じ發想に出るものであろう。

「南齊の高帝は、其の尤も精なる者を科^{はか}りて、古來の名手を錄し、遠近を以て次と爲さず、但だ優劣を以て差と爲す。陸探微自ら范惟賢に至る四十二人を、四十二等・二十七秩・三百四十八卷と爲す」。

『詩品』の場合は、その序において、「一品の中は、略^歴世代を以て先後と爲し、優劣を以て詮序と爲さず」といつているのだから、同じ品等法にしても、全く正反對の原則のたてかたである。或いは鍾嶸は、「不以遠近爲次、但以優劣爲差」という畫論の品等法に反撥する

ところがあって、自著の執筆方針を考えたのかもしれない。

もう一つ『詩品』と比べて異なるのは、批評の對象とする作家の選抜範圍である。『詩品』の序では上述の部分に引きつづいて、次のようにいつている。「又た其の人既に往きて、其の文克く定まる。今寓言する所は、存者を録せず。『詩品』が扱う百二十三人の詩人（但し、その中に「古詩」を含む）を時代によって見ると、上は前漢の中期から、下は梁の天監年間に至る約六百年間にわたっている。うち最も遅く亡くなったのは、梁の天監十二年（五一三）没の沈約であり、確かに存者は一人として録されていない。『文心雕龍』は梁初に完成していたが、批評の對象は東晉末までに限定されており、また西晉末に成った肇虞の『文章流別集』や『文章流別志論』は、一時代前の魏末までの詩文を扱うという原則を設けているから、ほんの数年前に亡くなった詩人を組上に乗せるといふ『詩品』の方法は、文學論の世界ではむしろ大膽な行きかただったのである。書論の場合でも、『四體書勢』『古來能書人名』『論書』など、批評の對象となる書人は、いずれも一時代前までの人に限られている。

これに對して、『古畫品錄』で取り上げられた二十七人のうち、最も古いのは三國吳の曹不興で、上限をかなり近いところに置いていたことがわかる。『歷代名畫記』の敘歷代能畫人名が黃帝の時の史皇から敘述を始めているように、能畫の人は古來少なくなかったはずだが、謝赫の批評にはそれら古い時代の人物を關している。ただ張彥遠が『名畫記』を著わすに際して、「必ずしも備さに其の蹤跡を見ず、但だ古え自りの畫を善くする者は、即ち之を載す」（卷四）と自らいふところから推測するに、謝赫は作品を目撃しえた畫人についてののみ品評を行なったのではあるまいか。詩や書に比べて、繪畫はおそらく實作

に接することが最も困難だったと想像できるからである。次に下限だが、これも『名畫記』に照してみると、第三品の陸泉・江僧寶の二人が梁の人とされるが、後者については實際は宋の人だった可能性が強いので、明らかに梁まで生きていたのは陸泉（四五九―五三三）一人といえる。著者謝赫の傳は前にも記したように不明だが、晉八人、宋十一人（江僧寶を含む）『名畫記』にのみ名のある劉胤祖を加えれば十二人、齊六人と、畫人のほとんどすべてがこの三代に集中していることを考えると、彼はやはり齊の時代までに活躍した人物を對象として選んだのではなかつたらうか。そうすれば陸泉はこの書の著わされた時點で、確實に生存していた唯一の例外になる。（當代棋人番付表のような性格を持つ『圍碁品』も、生存者を録してはいたのではないかと想像される。）

では、畫家に對する個別の批評のありかたはどうか。いま第一品の曹不興・衛協・張墨・荀勗四人に對する批評を、津逮本に據って舉例してみることにする。

「不興の迹は、殆んど復た傳うる莫し。唯だ祕閣の内に、一龍あるのみ。其の風骨を觀るに、名は豈に虚しく成らんや。」（曹不興評）

「古畫の略なるは、協に至つて始めて精なり。六法の中、兼ねて善しと爲すに迨る。形似を該ね備えずと雖も、頗る壯氣を得たり。群雄を陵跨し、曠代の絶筆なり。」（衛協評）

「風範氣候、妙を極め神に參わる。但だ精靈を取りて、其の骨法を遺る。若し拘るに體物を以てせば、則ち未だ精粹を見ず。若し其の意外を取れば、則ち方めて膏腴に厭く。微妙と謂う可きなり。」（張墨・荀勗評）

ここには三則のみを示したが、他の諸家に對する批評もまず大同小異である。それらは四字句を主に、平均四十字前後の文に構成された短評である。その批評眼はのちの張彥遠によつて、「詳かに觀るに謝赫の評量は、最も允愜と爲す。姚・李の品藻は、未だ安んぜざる所有り」(『歷代名畫記』卷二敍師資傳授南北時代)と推賞される。謝赫と比較された二人の批評家は、『續畫品』の著者陳の姚最と、『續畫品錄』の著者唐の李嗣眞とである。こうした高い評價を得ている謝赫の批評だが、批評としての獨自の面白味ということになると、やはり『詩品』に遠く及ばない感じである。鍾嶸は彼の時代つまり齊梁風の詩のありかたに對する強い不滿があつて、それを養分にして批評精神を培つて、單なる詩論の枠をはみ出したような面白さがあるのだが、謝赫の方はあくまで端正に論理を運ぶことに終始して、人間論にまで入りこんでしまふようなことはない。謝赫の書が齊末ごろ書かれていたとすれば、鍾嶸はそれを一つのヒントにした可能性はあるが、書論ほどにはその影響は顯著でないように見うけられる。

ただし、個々の批評用語については、直接の影響關係をひとまず別にしても、兩書の關連をいさ少し詳細に分析しておく必要がある。たとえば、衛協評に見える「形似」という語。これは『詩品』でも、「又た巧みに形似の言を構う」(上品張協評)のように用いられており、またほとんど同義と考えられる「巧似」の語も、「巧似を尙びて、逸蕩之に過ぐ」(上品謝靈運評)、「巧似を尙び、體裁綺密にして、情喻深遠」(中品顏延之評)、「巧似を尙して、危仄を避けず」(中品鮑照評)と三例が見える。「形似」は、また『宋書』謝靈運傳論、「文心雕龍」物色篇、『顏氏家訓』文章篇等にも用いられていて、六朝文學批

評におけるいわば習用の語である。この語の成りたちとしては、『世說新語』賞譽篇の「王平子、太尉を目して、『阿兄は形は道に似て、神鋒太だ儻る』」や、同排調篇の「桓豹奴は是れ王丹陽の外生にして、形は其の舅に似る」のごとく、「形似某」の形が原型と思われる。

ところで、先の衛協評の「雖不該備形似、頗得壯氣」(名畫記本では「而妙有氣韻」という文では、「形似」と「壯氣」(あるいは「氣韻」)が對應しあっている。前者が畫の形體的側面を、後者が精神的側面を指すのだが、この二つの側面の對應は、謝赫の批評においてしばしば見られる。「神韻氣力は、前賢に逮はざるも、精微謹細は、往哲に過ぐる有り」(第二品顧駿之評)、「氣力は足らざるも、精彩は餘り有り」(第三品夏侯瞻評)、「形色に略なりと雖も、頗る神氣を得」(第五品晉明帝評)、「精謹ならざるに非ざるも、其の生氣に乏し」(第六品丁光評)。また先に引いた張墨・荀勗評の「若拘以體物、……若取之意外……」もその中に含まれてよいだろうし、『名畫記』によれば、王微・史道預評の「王は其の意を得、史は其の似を傳う」(津逮本では「王得其細、史傳似眞」)にも明らかな對應關係が窺われる。かく表現こそとりどりだが、一方が「形似」の側面、他方が「壯氣」の側面を指すことはまずまちがいない。そして前者は謝赫の説く「論畫六法」のうち第三の「應物象形」と第四の「隨類賦彩」に相當し、後者は第一の「氣韻生動」と第二の「骨法用筆」に相當する。因みに張彥遠は、「氣韻生動」「骨法用筆」を「骨氣」に、「應物象形」「隨類賦彩」を「形似」にそれぞれいいかえている。(『名畫記』卷一論畫六法)。このことは、いわゆる「六法」が精神性と形體性の兩要素に集約されることを示唆している。

『詩品』にあつては、「形似」や「巧似」が特に積極的な價值を含

む評語として用いられているわけではないのに對して、「氣」や「骨」を含む語の方は、詩を内面からがっしりと支えるたくましい生命力を意味する語として、きわめて重要な意味を與えられている。「清剛の氣」(序)、「骨氣奇高」(上品曹植評)、「氣に仗りて奇を愛す」「眞骨は霜を凌ぐ」(上品劉楨評)、「自ずから清拔の氣有り」(中品劉琨・盧諶評)、「氣調警拔」(中品郭泰機等評)、「骨節は謝混よりも強し」(中品鮑照評)など、いずれもその例である。

これも先に引いた謝赫の陸綏評には、「風彩飄然」の句が見えていたが、これは『名畫記』では「風力頓挫」に作っており、「骨氣」と同方向の要素を持つ評語であろう。この語も『詩品』において、「建安の風力盡きたり」(序)、「之に幹とするに風力を以てす」(同)、「左思の風力に協う」(中品陶潛評)のごとく、積極的評價を示すことばとして用いられている。「氣」「骨」「風」等の評語が『詩品』と並ぶ『文心雕龍』でも重視されていること周知の通りであり、「氣」の尊重はずっと遠く三世紀の『典論』論文篇にまでさかのぼることができ、また「頓挫」も『詩品』中品謝朓評に、「感激頓挫」の例があり、抑揚の大きさを意味している。

他分野との關連でいえば、「氣」「骨」「風」は元來人物評論のテクニカルタームだったらしいことが、『人物志』や『世說新語』等の使用例によって推定できる。また書論では「骨勢」(古來能書人名)、「骨力」(論書)、「天骨」(庾肩吾「書品」)、「風氣」「骨體」「意氣」「骨氣」(袁昂「古今書評」)のような評語が珍しくない。このように人物論や文學藝術論の用語には、相互に關連しあうものが多いが、他方またそれぞれの分野での微妙な使い分けのあることも事實である。たとえば、『古畫品錄』ではすでに述べたように「骨氣」系の語は「形

似」系の語に對應しているが、『詩品』では兩系統の語がともに用いられていながら、兩者は必ずしも對應關係を示すとはいえず、書論に至っては、「形似」の語は管見の及ぶ限りにおいてその例を見ない。いま一つ例をあげると、「清怨」「清遠」「清雅」「清虛」「清苦」「清巧」「清剛」のごとく、語頭に「清」を冠する評語が、『文心雕龍』や『詩品』では多用される。これは後漢以來の人物評論で頻繁に行なわれた造語法が、陸機の『文賦』や陸雲が兄機に與えて文學を論じた一連の書簡あたりを契機にして、文學論の領域に導入されたもののように見うけられるが、他方書畫論においては、めったにこの類の評語を見ないのである。

書論から文學論に導入されたと覺しい語としては、既出の張墨・荀勗評に見られた「氣候」もその一つにあげられよう。『詩品』下品の謝莊評に、「氣候清雅」とあり、詩全體のこともし出すムードを指している。これまで垣間見てきたように、『詩品』と『古畫品錄』の批評用語はそれぞれ独自のニュアンスを持ちながらやはりある一定の關連性を保っているといつてよさそうである。

五

小論の最後に、『詩品』と庾肩吾の『書品』の關係について觸れておきたい。『詩品』はその成立にあたって、先行する書畫論からの影響や刺激を蒙ったらしいこと上に述べた通りであるが、一方また後起の藝術論にも多少の影響を及ぼしたのではないかと豫想しうる。その確率のかなり高いものとして、ここで『書品』を取り上げておきたいのである。

鍾嶸の生卒は『梁書』『南史』の本傳に記されていないが、姜亮夫

『歷代人物年里碑傳綜表』は、梁の武帝の天監十七年（五一八）、齡五十歳で世を去ったと考證している。それは本傳に、鍾嶸がその最晩年に西中郎將晉安王すなわちのちの簡文帝蕭綱の記室となり、やがて在官のまま亡くなったとある記事にもとづき、蕭綱の西中郎將就任が天監十七年であるところから推定されたものである。蕭綱は普通元年（五二〇）の九月まで西中郎將の任にあつたから、鍾嶸の没年も當然いくらか幅をもつて考える必要がある。

一方、『書品』の著者庾肩吾に關しても、『梁書』『南史』の本傳はその生卒を明らかにしないが、中大通六年（五三四）に書かれたと覺しい湘東王繹の『梁簡文帝法寶聯璧序』（『廣弘明集』卷三十）には、彼がこの年四十八歳だったことが記されているから、そこから算えれば齊の永明五年（四八七）の生まれになり、鍾嶸よりは二十年近い後輩にあたる。彼は若くして晉安王蕭綱のもとで宮廷詩人として名を馳せ、その後もずっと王に近侍した、いわば生えぬきの側近といつてよい人物である。鍾嶸が晩年に晉安王の府に加わつた一二年間に、二人は王の文學サロンで顔を合わせる機会がおそらく何度もあつたはずである。

『詩品』はこのころすでに完成していた。庾肩吾も鍾嶸と同様に「棺を蓋いて事定まる」という考えにもとづいて『書品』を編んだとすれば、この書に名を記される百二十三人の書人のうち、没年不詳の人はしばらく置き、没年の最も遅い陶弘景の死んだ大同二年（五三六）以後に、はじめてこの書は成つたとすべきであらう。『詩品』の完成に遅れること約二十年である。兩書の影響關係を考える可能性があるとすれば、鍾嶸から庾肩吾への方向を想定すべきであること、もはや言を待つまい。

『書品』は『詩品』と同じく上中下の品等法を用いているが、各等

級をさらに三分して、上之上から下之下に至る九つのランクを設けているので、實質上は『漢書』古今人表と同じ九段階評價になつてゐる。かく優劣の分析は『詩品』よりも詳しいが、書人に對する評論は九つの品等ごとに一括して行われているため、やや疎略の感があり、『詩品』に例の多い一人ごとの批評はここでは全く見られない。そして全書の冒頭には、書體の歴史を敍した總序を冠している。庾肩吾の意圖を忖度するに、彼は從來別々に理論づけがなされてきた書體論と作家論を縱軸と横軸の關係でとらえ、體系性ある書論を構築しようとしたものであらう。

庾肩吾は序において、「草隸を善くする者一百二十八人を刪す」というが、實際に名を連ねるのは百二十三人にとどまる。傳寫の間の脱落はもちろんありうるにしても、百二十三人という數は、奇しくも『詩品』に取り上げられる詩人と同數である。上品に列せられる書人はすべて十七人、うち上之上の最高位に在る張芝・鍾繇・王羲之をはじめとして、梁の阮研（上之下）を除く十六人までが漢から晉までの人で占められており、總體に「厚古薄今」が特色である。これは『詩品』に關してもほぼ同じことがいえる。鍾嶸は齊梁の技巧過多の詩を唾棄し、漢魏の生命力横溢する詩を理想としたから、上品十二家のうち、謝靈運一人が五世紀宋の人であるのを除き、他はすべて漢魏晉の人である。鍾嶸の尚古主義が、庾肩吾にとつてあるいは一つのヒントになつたかもしれぬ。

最高位の三人の書人を評するに際し、庾肩吾は「天然」つまり巧まぬ自然の妙味と、「工夫」つまり人爲の巧妙さという二つの批評基準を設定している。この語を書の評語に用いた例は虞龢『論書表』等にもあるが、それを批評基準にまで高めたのは、庾肩吾の功である。彼

によると、「張は工夫第一」で「天然之に次ぎ」、「鍾は天然第一」で「工夫之に次ぎ」、王は「工夫」は張に、「天然」は鍾に譲るが、「天然」「工夫」のバランスのとれている點では随一とされる。『詩品』でこの基準に相當するのは、「氣」(生命力)と「文」(表現)であろう。「氣」については先にも述べたが、「氣」と「文」の均衡がうまく保たれてこそ、理想的な詩人だと鍾嶸は考える。その理想を體現するのが魏の曹植であり、「骨氣奇高、詞彩華茂」と「氣」「文」両面で卓越する彼は、「氣」に秀でる劉楨や「文」に勝る王粲を壓して、古今詩人の最上位に置かれているのである。

庾肩吾は張・鍾・王三者の評論を、次のような贊辭で結んでいる。「若し孔門に書を以てせば、三子は室に入る」と。これは『詩品』曹植評の「故に孔氏の門に如し詩を用うれば、則ち公幹(劉楨)は堂に升り、思王(曹植)は室に入る」を多分に意識している。そして兩者はともに『法言』吾子篇の「如し孔氏の門に賦を用うるや、則ち賈誼は堂に升り、相如は室に入る」を模し、さらには『論語』先進篇の「由や堂に升れり、未だ室に入らざるなり」にまで源をさかのぼる。

『書品』が上品に列する十七人のうち、ただ一人梁の書家中から名を陳ねる阮研は、唐の寶泉の『述書賦』(『法書要錄』卷五)によれば、庾肩吾の師にあたる人である。そうした特殊な關係が評價に幾分か私情をさしはさませた可能性もないではあるまいが、彼に對しては次のような批評が加えられている。「阮研は今に居て古えを觀、盡く衆妙の門を窺う。復た王「羲之」を師とし鍾「繇」を祖とすと雖も、終に別構の一體を成す」。この結びの「終成別構一體」は、わかりにくい表現である。だがこれが實は『詩品』の王粲評にもとづくことを知れば、批評の含意がよく理解できる。王粲評には、「曹・劉の間に在っ

て、別に一體を構う」とあり、「別構一體」を庾肩吾はそのまま切り取って、一つの名詞句のように用いたのである。その奥には、王粲が曹植・劉楨に一步を譲りながらも自ずと別種の風格を構えるように、王・鍾を範とする阮研も、兩者に及ばぬとはいえ、獨自の書風を持つことをにおわせていよう。

初唐の李嗣眞の『書後品』(『法書要錄』卷三)は、その名の示すごとく『書品』の直接の後繼者といふべき書人論だが、その評論にはまた『詩品』に由来するいいまわしを用いた個所がいくつも見られる。たとえば逸品贊の「秦相刻銘、爛若舒錦」(秦相の銘を刻するは、爛かなること錦を舒ぶるが若し)は『詩品』上品潘岳評の「潘詩爛若舒錦」に、中下品の「雖欲矜毫、亦復平矣」(毫を矜らんと欲すと雖も、亦た復た平なり)は同じく下品傅亮評の「今沈特進撰詩、載其數首、亦復平美作美」に、同「康樂往々驚逸」(康樂は往々にして驚逸)は中品謝朓評の「然奇章秀句、往々警逸」にそれぞれ做ったものに他ならない。李嗣眞にはこの他さらに『詩品』『書品』(『續書品錄』各一卷)『舊唐書』本傳・『新唐書』藝文志)のあったことがわかっている。『書後品』序に、「吾『詩品』を作るに、猶お神交に偶合し、自然に冥契するを聞くこと希なる者は、是れ才難ければなり」とあるから、恐らく『詩品』の方が先に著わされていたのであろう。詩・書・畫の三分野で同じ方法論を用いて批評を行なうことに、著者はほとんど抵抗感を覚えていなかったのかもしれない。

このように、庾肩吾や李嗣眞の書論中に『詩品』の影を見出すことは可能なのだが、ただそれらがどこまで批評としての本質に對する影響といえるかは、いささか疑問であらう。少なくとも鍾嶸の批評が先行の書論から受けたほどの發想上の影響を、後來の書論に與えること

はなかつたのではないか。もし假りに優劣論に重きを置く書論の發想がなかつたとしたら、『詩品』は或いは生まれにくかつたかもしれぬが、反對に『詩品』が存在しなかつたとしても、『書品』や『書後品』は著わされていたにちがいない。

『詩品』の評論はいわば詩話の元祖ともいえる性格を持ち、唐・殷璠の『河嶽英靈集』や高仲武の『中興間氣集』等の詩人評は、明らかに鍾嶸の方法の一部を受け繼いでいる。たとえ『中興間氣集』李嘉祐評の「中興高流、與錢郎別爲一體」(卷上)や、李季蘭評の「上傲班姬則不足、下比韓英則有餘」(卷下)が、すでに取り上げた『詩品』王粲評の、また李希仲評の「此所謂才力不足、務爲清逸」(卷上)が謝瞻等評のそれぞれじりであることは一目瞭然だらう。しかし、『詩品』における批評方法の要ともいべき品等方式は、これらの書ではもはや無縁のものでしかない。『四庫全書總目提要』が『河嶽英靈集』現行本の三卷構成から類推して、「鍾嶸三品の意を隱寓す」るものと考えるのは、殷璠の序が自らこの書を「分ちて上下二卷と爲す」といひ、さらに新唐志や『直齋書錄解題』がまさしく二卷の書として著録する點からいっても、多分誤解といつてよい。書畫論の領域においては、品等による評論の餘波がなお續き、唐・張懷瓘の『書斷』書人論や張彥遠の『歷代名畫記』敍歷代能畫人名のごとき重要な著作が著わされているのに比べれば、文學論における品等方式はほとんど『詩品』一代で終焉を見たといつても過言ではなからう。唯一の例外は李嗣眞の場合だが、しかしそれも『書後品』が後世に傳わりながら、『詩品』の方は夙に佚し去つた事實をよく考えてみる必要がある。あまりにも露わに「優劣を顯わす」品等方式の評論は、文學の世界ではやはり本質的にどこかなじみにくいところがあつたのだらうか。

註(1) 津逮秘書本『法書要錄』に、虞蘇を梁の人とするのは誤り。杉村邦彦『論書表』解説(『中國書論大系』第一卷所收、一九七七年二玄社)に詳しい考證がある。また書論の歴史における虞蘇『論書表』の意義を考察した論文に、谷口鐵雄「書の品等論の成立について—虞蘇の『論書表』を中心に」(『東洋美術論考』所收、一九七三年中央公論美術出版)がある。

(2) 梁・阮孝緒の『高隱傳』が上中下の品等方式を用いていたという『南史』隱逸傳の記述も、いかにもこの時代を思わせる。「乃著高隱傳・上自炎皇、終於天監末、斟酌分爲三品。言行超逸、名氏弗傳、爲上篇。始終不耗、姓名可錄、爲中篇。挂冠人世、栖心塵表、爲下篇」。

(3) 『詩品』序に、「今所寓言、不錄存者」とあるところからすれば、この書に取り上げられた詩人のうち、没年の最も遅い沈約(五一—三没)の死後、鍾嶸の推定没年(五一—八)に至る數年間に著わされたことになる。

(4) 「筆迹流憚、宛轉妍媚、乃欲過之」(『論書表』)。「雖太傳之婉媚、既好領軍之靜澹合緒、方之震如也」(『論書』)。「媚」の字は、『文心雕龍』において、「窮環奇之服饌、極蠱媚之聲色」(雜文)のような形で用いられているが、批評用語として使用された例はない。

(5) 津逮本第二品の顧駿之を、『名畫記』は顧景秀に作る。また『名畫記』が「第三品晉明帝の下に在り」という劉胤祖は、津逮本には見えない。

(6) 「是書等差、畫家優劣、晁公武讀畫志謂分四品、今考所列、實爲六品、蓋讀畫志傳寫之譌。大抵謂畫有六法、兼善者難。自陸探微以下、以次品第、各爲序引、僅得二十七人、意頗矜慎」(『四庫全書總目提要』子部藝術類)。

(7) 與膳『文心雕龍』解説(『世界古典文學全集』第二十五卷、一九六八年筑摩書房)、及び『華虞文章流別志論攷』(『入矢小川教授退休記念中國文學語學論集』、一九七四年)参照。

(8) 『名畫記』卷二敍師資傳授南北時代に、江僧寶は哀情・陸探微（いづれも宋人）及び戴逵（晉人）を師としたとあり、また宋の人吳暉は江僧寶を師としたとある。同卷七敍歷代能畫人名にも、「斟酌袁陵、親漸朱藍」とある。

(9) 「雖不備該形似」一句は、『名畫記』による。津逮本では、「雖不說備形妙」に作る。

(10) 「若取其意外、則方厭膏腴」二句は、『名畫記』による。津逮本は「若取之外、方厭高腴」に作る。

(11) 「相如工爲形似之言、二班長於情理之說」〔宋書〕謝靈運傳論。『自近代以來、文貴形似、窺情風景之上、鑽貌草木之中』〔文心雕龍〕物色。『何遜詩實爲清巧、多形似之言』〔顏氏家訓〕文章。

(12) 『名畫記』は「筆精謹細」に作る。

(13) 『名畫記』は「氣韻不足、精密有餘」に作る。また夏侯瞻の名は『名畫記』による。津逮本では侯字を缺く。

(14) 「彥遠試論之曰、古之畫或能移其形似、而尙其骨氣、以形似之外求其畫、此難可與俗人道也。今之畫、縱得形似、而氣韻不生、以氣韻求其畫、則形似在其間矣」〔名畫記〕卷一論畫六法。

(15) 「文以氣爲主、氣之清濁有體、不可力強而致。譬諸音樂、曲度雖均、節奏同檢、至於引氣不齊、巧拙有素、雖在父兄、不能以移子弟」〔典論〕論文。

(16) たとえば『人物志』九徵に、「彊弱之植在於骨、躁靜之決在於氣」、同八觀に、「是故骨直氣清、則休名生焉。氣清力勁、則烈名生焉」、『世說新語』賞譽に、「（王右軍）道祖士少、風領毛骨、恐沒世不復見如此人」、同輕詆に、「舊目韓康伯、將肘無風骨」などの例が見える。

(17) 與臚『潘岳陸』〔中國詩文選〕10、一九七三年筑摩書房、釜谷武志「陸雲『兄への書簡』——その文學論的考察」〔中國文學報〕第二十八冊、一九七七年）を参照。

(18) 「張（芝）字形不及右軍、自然不及小王」〔論書表〕。「宋文帝書、自謂不減王子敬、時議者云、天然勝羊欣、功夫不及欣」、「孔琳之書、天然絕逸、極有筆力」〔論書〕。

(19) 「肩吾……徒聞師阮研、何至遠竄」〔述書賦〕。

一九七九年二月二三日

本稿を草するに當っては、『中國書論大系』第一・二卷（二玄社）、岡村繁・谷口鐵雄譯『歷代名畫記』〔中國古典文學大系54『文學芸術論集』所收、平凡社〕、長廣敏雄譯注『歷代名畫記』1・2〔東洋文庫〕三〇五・三二一、平凡社）の各書から、多くの教示を得た。記して深く謝意を表す。